

戦争体験と戦後思想

——橋川文三を中心に——

問題の設定

占領下の統制された言論状況を経て、アジア・太平洋戦争の経験が主題化されたのは、冷戦体制の確立と朝鮮戦争の勃発という事件に直面した一九五〇年以降のことである。戦後日本における戦争責任意識も、五五年頃を境にして新しい段階へ移行したが、それは鶴見俊輔が指摘するように、「戦争責任意識の制度的形成の時代」から「戦争責任意識を自力でつくりだす動き」が見えるという変化に示された。すなわち、東京裁判、公職追放、憲法および法律の改廃、教育の改革などで占領軍によって作られた戦争責任意識を克服して、自力で戦争責任意識を創り出す試みが見られたのである⁽¹⁾。

本論文は、橋川文三（一九二二—一九八三年）の思想的作業のうち、一九五〇年代後半から六〇年代にかけてのテキストを取り上げ、それらが戦後思想の中に占めた位置を検討するものである。橋川の思想的作業の独自性は、「戦争体験」論など同時代の思想状況に関する発言とともに、日本政治思想史研究の分野において、「昭和超国家主義」に関する分析などナショナリズム論を展開した点にある。本論文で明らかにするように、橋川のナショナリズム論は、政治学的な分析である一方で、エッセイを通じて自己分析の様相も呈しており、それらは当該期の戦争責任論・戦争体験論の動向に深く関わっていた。

本論文では、第一に、一九五〇年代から六〇年代前半にかけての丸山眞男・竹内

平野敬和

好の議論を参照することから、当該期に戦争体験を問うという立場が、戦争責任論の動向にもたらした影響を分析する。第二に、丸山や竹内との関係を踏まえた上で、橋川がどのようなかたちで自らの「戦争体験」に向き合ったのかという問題について、彼の「戦争体験」論、日本浪曼派批判を取り上げる。第三に、橋川のナショナリズム論に関して、丸山の思想史の方法論を意識するかたちで提示された「昭和超国家主義」論の独自性を検討する⁽²⁾。

一 丸山眞男と竹内好の戦争責任論・戦争体験論

鶴見が指摘したように、戦後日本における戦争責任意識は、一九五五年頃を境に新しい段階へ移行した。丸山眞男の「戦争責任論の盲点」は、戦争責任論について明快な立場を打ち出すことによって、その論理展開に新たな地平を切り開いたものである。丸山はこの中で、戦争責任を主体的に問うために、主観的心情ではなく客観的結果を重視する政治的な責任問題の考え方を導入し、具体的には天皇と共産党の問題を取り上げた。すなわち、前者については、「自らの地位を非政治的に粉飾することによって最大の政治的機能を果たすところに日本官僚制の伝統的機密がある」とすれば、この秘密を集約的に表現しているのが官僚制の最頂点としての天皇にはかならぬ⁽³⁾という論点を提示し、後者については、共産党が有効な反ファシズム・反帝国主義闘争を組織化できなかったことを指摘し、戦後における共産党の非転向という「超越的立場」への違和感を表明したのである。

この問題提起を受けて、思想の科学研究会一九五六年度総会では、「戦争責任について」という主題で討論が展開された。丸山はその中でも、「責任の意識がなく、かえって支配層を構成していた人々が被害者意識しか持っていないということ」は、つまり支配層にリーダーシップの自覚がなかったということと関係がありま

す。じゃ何故日本の支配層に政治的リーダーシップの自覚が少なかったか、という問題になります」と述べ、「戦争に突入した頃の日本の天皇制自身がいわば一個の龐大な「無責任の体系」だと思ふのです」と自説を展開した。「要するに私が問題にしたかったことは、ファシズムと戦争を客観的に推進した諸力と、彼等の主観的な意図なり意識なりのギャップが日本の場合非常に大きいこと、しかもそのこと自身単に人柄とかモラルの問題でなく、そういうギャップがでて来る機構的な必然性があったということ、これを社会科学的に、また歴史的に解明することが非常に大事だということ」⁵⁾。ここに見られる丸山の戦争責任論は、「超国家主義の論理と心理」(一九四六年)や「軍国支配者の精神形態」(一九四九年)を始めとする、「日本ファシズム」批判の豊かな成果を踏まえたものである⁶⁾。

竹内好もまた、思想の科学研究会一九五六年度総会に参加していたが、そこではほとんど発言を残さなかった。その後、討論の記録が『思想の科学会報』に掲載される際に寄せた一文に、彼の立場性が良く示されている。竹内は其中で、第一に「戦争責任は究極には個人の責任、したがって道徳責任に帰着する―あるいはそれが出発点になる」こと、第二にその問題を追求する方法として、「告白という経路」が必要であること、第三に戦争責任を考える場合に、「日本の近代化の問題」(とりわけ、中国との比較)を考えなければならないことを挙げた。ここには、戦後の思想状況において意識化された問題を、あえて戦中の自らの立場を探索する作業として問うという、自己省察の姿勢を見て取ることができる。

竹内のアジアへの責任論は、「戦争責任について」において、「戦争責任論が成立するためには、加害意識の連続が前提になり、そのためには戦争処理が完結していない、あるいは戦争そのものが事実としておわっていないという認識が必要であるように思う」として、戦争体験と戦争責任を普遍化することの困難性を指摘した箇所にもあらわれている。

私は、(中略)日本の行った戦争の性格を、侵略戦争であって同時に帝国主義対帝国主義の戦争であり、この二重性は日本の近代史の特質に由来するといふ仮説を立てた(『近代日本思想史講座』第七卷「近代の超克」)。したがって、侵略戦争の側面に関しては日本人は責任があるが、対帝国主義戦争の側面に関しては、日本人だけが一方的に責任を負ういわれはないという論である⁹⁾。

このようなアジアへの責任の強調は、東京裁判がアメリカの主導の下になされた責任追及であって、アジアからの視点を欠いていたことに対する異議申し立てという意味を含んでいた。その上で、竹内は、「民族感情に自然な責任感の伝統をよりどころとする「責任意識」、すなわちアジア、とりわけ中国に対する侵略の痛みをもとにした「責任意識」の構築を唱えたのである¹⁰⁾。

竹内は一九六〇年の日米安保条約反対運動以降、世代間での戦争観の乖離に不安を抱きつつ、戦争体験に関する文章をいくつか発表した。「戦争体験の一般化について」では、安保運動という共通体験を戦争体験の結実と見て、逆に戦争体験へとさかのぼる方法、すなわち「戦争体験を戦後体験と重ねあわせて処理するという方法」を提起している¹¹⁾。

若い世代の一部あるいは多数が、前世代の戦争体験を白眼視したり拒否したりするのは、戦争体験の封鎖性を前提にするかぎり、もつともな理由があるといえる。しかし、もし彼らが主観的に拒否すれば戦争体験の世代と切れると考えるならば、そのこと自体が戦争の傷から解放されていないこと、彼らもまた戦争体験の特殊化の被害者であることを証明している。遺産を拒否するという姿勢そのものが遺産の虜である。歴史を人為的に切断することに私は反対ではないが、切断するためには方法をもってしなければならぬ。戦争の認識を離れてその方法が発見できると思えない¹²⁾。

この文章からは、竹内が、戦争体験をどのようにして一般化するかという課題について、世代を超えた「理念」へと練り上げる必要性を感じていたことを読み取

れよう。そうした問題関心は、次に取り上げる橋川の議論とも重なるものである。

二 橋川文三の「戦争体験」論

— 思想史研究とエッセイの間 —

丸山や竹内とは異なり、橋川文三の文章には「戦中派」としての独自の問題関心が刻み込まれている。橋川は一九五〇年代後半から六〇年代にかけて、「戦争体験」と「世代」をめぐって、繰り返し発言した。そこには、第一に「戦中派」の立場からする先行世代に対する異議申し立てという側面、第二に「戦後派」からの突き上げに応答するという側面があった。しかし、橋川の問題提起を世代論に収斂させるなら、その議論の射程を見誤ることになるだろう。そこには、世代的自己主張に止まらない、思想の方法の根幹に関わる問いがあったのである。

「戦争体験」論の意味」を始めとして、この時期に発表された文章には、竹内の影響を色濃く見て取ることができる。ここでは、「戦争体験」論が本格的な意識と方法の下に追及され始めたという情況認識に基づき、「戦争体験」を問うことを通じて、責任的主体の立ち上げを目指す議論が展開された。

私たちが戦争という場合、それは超越的意味をもった戦争をいうのであって、そこから普遍的なるものへの窓がひらかれるであろうことが、体験論の核心にある希望である。感傷とか、同窓会趣味とかには縁もゆかりもない。(中略)戦争体験にこもる個々の感傷の集成というのを、私たちは、戦争体験論の課題とは考えないのである。ことばはややおかしいが、「超越者としての戦争」——それが私たちの方法なのである。¹³⁾

橋川は、「同窓会趣味」とは責任的主体が問われない構えであると批判したが、そこには石原慎太郎など下の世代からの突き上げに応答することが企図されていた。その上で、橋川は戦争について、日本人が歴史意識を形成する契機と解釈したのである。

敗戦は、国体という擬歴史的理念に結晶したエネルギーそのもののトータルな挫折を意味した。そのことは、いいかえれば、開国Ⅱ維新過程において一面においては開かれ、他面においては閉ざされた本来的な歴史意識のための、本当の解放がはじめてもたらされたことを意味する。¹⁴⁾

橋川は、「太平洋戦争の過程を、歴史過程としてでなく、超越的な原理過程としてとらえようという提言¹⁵⁾」をすることから、竹内の呼びかけに応えようとした。このような「戦争体験」への関心は、先行世代が切り捨てたナショナリズムの深さと広がり問い直す「世代的な関心」とも重なっていた。

橋川の最初の著作である『日本浪曼派批判序説』は、戦後初めての本格的な日本浪曼派批判であると同時に、「戦中派」の戦時体験の思想的意味を問うたものである。彼が『日本浪曼派批判序説』の諸論稿を書いたのは、一九五七年から六〇年にかけて、戦後民主主義思想の論点がほぼ出尽くし、新たな批判に晒される最中のことである。丸川哲史が指摘しているように、橋川が戦後過程において日本浪曼派の問題を主題化したことには、「戦後革命(の挫折)から「民族」への注目という、五〇年前後における批判的知識人の問題意識の移動」があり、その背景としては、「日本共産党の「占領軍Ⅱ解放者」規定の撤回と、コミンフォルムによる新たな指導、新中国の成立などによって加速された「民族解放・反帝国主義」路線への傾斜」を挙げることができる。¹⁶⁾

橋川はこの著作の中で、戦前から戦中にかけて反近代と古典回帰を唱えた日本浪曼派、とりわけ保田與重郎の色濃い思想的影響を受けた自らの体験を批判的に考察することを試みたが、そこには日本浪曼派をウルトラ・ナショナリズムとして黙殺するだけで、その心情のあり様を内在的に批判し得ない戦後の論壇に対して、疑念を呈する意味が込められていた。すなわち、橋川が、一九三〇年代初頭に顕著な転向現象の収束した後に思想形成を行った世代がなぜ日本浪曼派に「いかれた」のかを主題としながら、浪曼派体験の思想史的位置付けを試みたのは、日本浪曼派に「いかれた」精神構造は自分たちの世代に止まらず戦後も生き続け再生産されているのではないか、そしてその心情のあり様は戦後社会が問題化し得ない病理として

あるのではないか、という問題関心を提示するためであった。彼は、敗戦までの昭和精神史を形成した二つの型であるマルクス主義と転向に加えて、日本浪漫派をそれらと等価のものと考えたのである。その作業を通して、橋川は日本浪漫派のテクストを読む／批判すると同時に、浪漫派体験が破綻した戦後の思想状況に向き合うことを目指した。

戦後、日本ロマン派は全く抹殺され、黙殺されてきた。それには、しかるべき理由があったし、それについては、後にふれることにする。しかし、戦後のいわゆる「デモクラシイズム」の風潮にもかかわらず（それ故にか）、日本ロマン派の提示したはかないような問題意識は、それとしてどこか奥底の方でよどんでいるという感じを私はいまだく。それは恐らく、いわゆる反動・復古主義の動向とはかかわりない形で、しかも、それに随伴する逆説的な否定的エネルギーとして、再び同じ精神史上の笑うべきドラマを現すかもしれない。かつてそれがあつたと同じ意味で、しかも自らが再び登場することの愚劣さを自らイロニイとして¹⁷⁾。

戦後の思想状況を見据える中で、何かわだかまってものを言うといった感のあるこの文章は、「精神史上の笑うべきドラマ」を問わないで済ましている戦後社会への異議申し立てこそが、橋川の思想的課題であつたことを示している。また、この文章には、日本浪漫派という橋川にとって自明な原体験が、他の多くの人々にはよくわからないものとして存在することへの憤りも含まれていただろう。橋川は『日本浪漫派批判序説』の副題として「耽美的パトリオイズムの系譜」を掲げ、あえて日本浪漫派をその系譜のうちに捉えることから、ナショナリズムのウルトラ化を自己の責任外の出来事とした戦後の思想状況を批判することを試みた。

「私たちの感じとつた日本ロマン派は、まさに「私たちは死なねばならぬ！」という以外のものではなかった¹⁸⁾」とは、橋川による「戦争体験」の告白であり、そうであるがゆえにこの著作は、ロマン主義の思想構造の特質を歴史上に辿る思想史研究という体裁をとりながらも、戦中から戦後に持続する精神構造にこだわる自己分

析の様相を呈しているのである。そこには、次のような「世代的関心」があつた。

こうして私の日本ロマン派に対する関心は二重の構造をもつ。一つは、いうまでもなく、日本ロマン派という精神史的異常現象の对象的考察への関心であり、もう一つは、その体験の究明を通して、自己の精神史的位置づけを求めたいという衝動である。この後者の関心は、いわば私の世代的関心ともいえるものである¹⁹⁾。

その精神的痕跡を刻印されるかたちでの歴史への関心は、以後の橋川の思想的作業に受け継がれていく。それは、自分の内部に「無数の死者」を抱え込んだという「戦争体験」へのこだわりに通じているのである。

三 橋川文三の「昭和超国家主義」論

—思想史の方法論をめぐる問い—

橋川文三における「イロニイとしてのロマン主義という問題関心」は、西郷隆盛・岡倉天心・北一輝・柳田國男など、明治国家の形成過程を通して打ち消されていったロマン主義の系譜を辿り、彼らのロマン主義が現実の明治国家体制に対していかにイロニクな意味を持ち得たのか、を主題とする思想史研究として展開される。それは、近代化の過程における「近代と反近代」の相克を描き出す作業でもあつた。それが、橋川の思想史研究を貫く主題であることは、「私がたとえばあの戦争の死者に対する態度は、簡単にいえば西郷隆盛や木戸孝允が維新時の死者に涙した境遇と同じものである²⁰⁾」という、晩年の文章にも明らかである。そこで、次に、日本浪漫派批判で示された問題関心が、どのようなかたちで以後の思想史研究に持ち越されるのか、という点について考察を進めたい。

橋川の思想史の方法論は、丸山の「超国家主義」批判を意識するかたちで発表された「昭和超国家主義の諸相」に見ることができ。橋川はその中で、「あの太平洋戦争期に実在したものは、明治国家以降の支配原理としての「縦軸の無限性、

云々」ではなく、まさに超国家主義そのものであったのではないか」と述べているが、そこには丸山がファシズムと結び付いた昭和初期の「超国家主義」を「国家主義の極端形態」と見做し、明治期からなし崩し的に拡張した軍国主義的ナショナリズムのあり方を批判したことに対する、橋川の立場性の違いを見て取ることができると。橋川は、日本の超国家主義を国家主義一般から区別するための歴史的視座を構築するという課題を、強く意識していた。

「昭和超国家主義の諸相」では、朝日平吾から、血盟団、北一輝、石原莞爾に至るまで、「テロリズムをひきおこした暗黒な衝動がいかなる構造をもち、どのような心性から生れているか」という点に関心が示された。橋川は「超国家主義」の世界を問題とすにあたって、その特性を示すものとして、暗殺者の心理にこだわったのである。

人間が絶対の意識にとらえられやすい領域の一つが宗教であり、他の一つが政治であるとするなら（もう一つ、エロスの領域があるが）、テロリズムは、その二つの領域に同時に相渉る行動様式の一つとみることでもできるであろう。

そしてまた、それが人間行動の極限形態として、自殺と相表裏するものであることが認められるとするなら、その両者の様式を規定するものとして、テロリズムの文化形態ということも言ってもかまわないであろう。

その上で、「超国家主義」の中には、「なんらかの形で、現実の国家を超越した価値を追求するという形態が含まれている」という問題を提起することから、彼らの中に「求道＝革命的自我意識」の存在を読み取ったのである。しかし、この論文はテロリストの心性に内在的に踏み込む際に、対象とどれ程の距離をとるのか、という点に問題がある。それゆえ、思想史研究としての完成度は高くない。

ただ、後にこの論文が収められた「近代日本政治思想の諸相」の「あとがき」を見るなら、「昭和超国家主義の諸相」における「超国家主義」へのアプローチは、より深く思想史の方法論をめぐる問いを含んでいたことを理解できる。

私はあの凄まじい超国家主義時代の経験をたんなる錯誤としてではなく、また特殊日本の迷妄としてではなく、まさしくある一般的な人間の事実としてとらえなおすことによつて、かえつて明朗にこれに対決する思想形成が可能であるという風に考えた。この考え方は、私がかつて日本浪曼派の問題を取り扱った場合と同じである。一般にそれらを理解を絶した異常現象として切捨てるやり方が、戦前のあの思想的な転換期において、いかに無力であったかということとは、私の戦争体験に刻みこまれた根本的認識の一つである。

この種の問題を考へるとき、私がいとも念頭においているのは、その分析ないし批判が、その対象とされる人物なら人物の全体像を前にして、果して十分に有効な威力を発揮しうるか否かといういく分変わった関心であった。これは或いは学問的な態度というより文学的もしくは倫理的な態度といふべきかもしれないし、歴史論としていえば、実証というより史論に傾くということかもしれない。そしてその意味で、私の方法における偏見といふべきものかもしれない。

ここで言われる「文学的もしくは倫理的な態度」とは、橋川が思想史研究のスタイルを的確にあらわすものである。橋川が指摘するように、「昭和超国家主義」への批判もまた、超越的な非難に止まらない点において、日本浪曼派に対する批判に共通している。しかし、そうした態度ゆえに、その思想的作業は困難を極めざるを得なかった。日本浪曼派への批判が、一度そこをかくぐつており、それに「いかれた」体験が破綻したという現実から立てられていたとするなら、「昭和超国家主義」に対する批判は、そのような意味での体験に基づかない点において、その論理との距離が取れない息苦しさを感じさせる。すなわち、彼はテロリストの心性に内在的に踏み込むことにより、テロリズムが破綻する状況を厳しく見極めることができなかったのではないか。私には、この点にこそ、日本浪曼派批判から「超国家主義」批判へと議論を展開させた橋川の思想的作業の困難性があるように思われる。それは、先に引用した、「私がかつていえばあの戦争の死者に対する態度は、簡単にいえば西郷隆盛や木戸孝允が維新時の死者に涙した境遇と同じものである」とい

う文章にもあらわれているように、自らの「戦争体験」を「超歴史的」な視座の中に置き換えてしまふ、橋川の心性の問題でもあるだろう。

むすび

橋川の思想的作業の独自性は、「戦中派」として「戦争体験」にこだわり、常にその立場から戦後社会への違和感を表明した点にある。また、思想史の方法論についても、日本のナショナリズムを内在的に批判する、という姿勢が顕著である。その思想的作業への評価に関しては、橋川が切り開いた地平を見出すと同時に、彼の議論の困難性を見極めて、その有効性を再検討する必要がある。それによって、橋川が執着した戦中から戦後の精神構造を歴史化すると同時に、その呪縛からの解放が可能になるであろう。

本論文で明らかにしたように、日本浪曼派批判から「超国家主義」批判への展開には、戦後の思想状況が影を落としていた。橋川が見出した領域については、あくまで彼の置かれた社会的背景を押さえながら、その議論を思想的に位置付ける作業が必要である。具体的には、「昭和超国家主義の諸相」の問題関心を引き継ぐかたちで発表された『昭和維新試論』（一九七〇—七三年、単行本は八四年）など、ナショナリズム論の展開をどのように読むのか、という問題が残されている。それについては、稿を改めて論じたい。

注

- (1) 鶴見俊輔「戦争責任の問題」『思想の科学』一九五九年一月号（鶴見俊輔著作集」第五卷、筑摩書房、一九七六年、三七頁）。
- (2) 橋川の日本浪曼派批判については、平野敬和「ロマン派体験の思想史——橋川文三『日本浪曼派批判序説』を手掛かりに——」（『甲南女子大学研究紀要』第四二号 文学・文化編、二〇〇六年三月）を参照されたい。
- (3) 丸山眞男「戦争責任論の盲点」『思想』一九五六年三月号（『丸山眞男集』第六卷、岩波書店、一九九五年、一六三頁）。
- (4) 「討論」戦争責任について」『思想の科学会報』第一七号、一九五七年三月二〇日、二三頁。

- (5) 「討論」戦争責任について」二五—二六頁。
- (6) この点に関しては、平野敬和「著作解題／丸山眞男『現代政治の思想と行動』」、同「著作解題／丸山眞男『戦中と戦後の間』」（『KAWADE 道の手帖 丸山眞男』河出書房新社、二〇〇六年）を参照されたい。
- (7) 「討論」戦争責任について」四一—四二頁。
- (8) 竹内 好「戦争責任について」『現代の発見』第三卷、春秋社、一九六〇年（『竹内好全集』第八卷、筑摩書房、一九八〇年、二二二頁）。
- (9) 竹内 好「戦争責任について」二二六頁。
- (10) 竹内 好「戦争責任について」二二七頁。
- (11) 竹内 好「戦争体験の一般化について」『文学』第二九卷第二二号、一九六一年二月（『竹内好全集』第八卷、二二〇—二二二頁）。
- (12) 竹内 好「戦争体験の一般化について」二二七—二二八頁。
- (13) 橋川文三「戦争体験」論の意味」『現代の発見』第二卷、春秋社、一九五九年（『橋川文三著作集』第五卷、筑摩書房、一九八五年、二四七—二四八頁）。
- (14) 橋川文三「戦争体験」論の意味」二五二—二五三頁。
- (15) 橋川文三「戦争体験」論の意味」二五二頁。
- (16) 丸川哲史「橋川文三『日本浪曼派批判序説』」岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編『戦後思想の名著50』平凡社、二〇〇六年、二四六頁。
- (17) 橋川文三「日本ロマン派の諸問題——その精神史と精神構造をめぐって——」『文学』第二六卷第四号、一九五八年四月、四二—四三頁。
- (18) 橋川文三「日本浪曼派批判序説」未來社、一九六〇年（『橋川文三著作集』第一卷、筑摩書房、一九八五年、三六頁）。
- (19) 橋川文三「日本浪曼派批判序説」一〇頁。
- (20) 橋川文三「戦中派とその「時間」」『毎日新聞』一九八〇年四月五日（『橋川文三著作集』第五卷、三六三頁）。
- (21) 橋川文三「昭和超国家主義の諸相」『現代日本思想大系』第三二卷「解説」、筑摩書房、一九六四年（『橋川文三著作集』第五卷、七頁）。
- (22) 橋川文三「昭和超国家主義の諸相」八頁。
- (23) 橋川文三「昭和超国家主義の諸相」八頁。
- (24) 橋川文三「昭和超国家主義の諸相」六三頁。
- (25) 橋川文三「近代日本政治思想の諸相」『あとがき』未來社、一九六八年、三八七頁。

付記

本論文は、日本学術振興会の研究助成および文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

The Experience of World War II and Thought in the Postwar Days

——mainly on Hashikawa Bunsō——

HIRANO Yukikazu

Abstract : In this paper, I take up Hashikawa Bunsō's work from the latter half of 1950's to 60's, and examine the position that it occupied in the thought after the Pacific war. His originality was in the point to have made remarks on the experience of the war as well as to have developed the discussion about nationalism. His discussion about nationalism was a politics analysis and the self-analysis through the essay.

First, I inspect the influence that the discussion about the experience of the war exercised on the discussion, in the postwar days, about the responsibility for the war, making reference mainly to Maruyama Masao and Takeuchi Yoshimi. Secondly, I take up Hashikawa's discussion about the experience of the war and his criticism on the Japan Romantic School. Thirdly, I examine the originality of his discussion about "Shōwa era ultranationalism".